音曲に、祝言・幽曲・恋慕・哀傷・闌曲の五音曲是あり。

一、祝言と者、安楽音也。直に云たるが、やすやすとくだりて、治声なるかかり也。此やすく云流したるかかり正体全音、天政の位を、大事に思う宛てがい、又大事也。念ろうすべし。

　又、幽曲者、是は、以前の祝言にかかりを添えたり。声位をなびやかにやりて、曲を埋みて、上を美しくして、しかも正しき曲流也。花・月の夕・曙を、同時一見の眺めなり。体用なるを、用を体にして、体を埋む由也。如此の位を得て、其曲主となるを、能一の上手とは申也。

恋慕と者、これも柔和なる内に、あはれを添えたり。なにとやらん感ありて、あはれに凄き曲聞也。文字を少し訛る匂いに是は曲聞の在所あるべし色どりて、曲を埋み、感をあらはす音聞也。この訛ると云声ざし、よくよく知べし。抑、訛ると云事、大事あり。訛るを、ただ悪き事のみに、一偏には思うべからず。声明・伽陀などにも、訛る響きなくてはかなはぬ曲所あるべし。軽・重・清・濁は上により、又便音など申事も、この訛る用音なり。よく訛り、悪しく訛ること、是非の分目、分明に知るべき也。よき訛りは、音曲の花ともなる也。それは、訛るとも聞えまじき也。ただ、訛りの内の是非を聞分る事、堪・不堪の曲者によるべし。然ば、柔和なる内に曲鉛を埋みて、あはれに凄き音聞の響き、是、恋慕の姿懸なるべし。さるほどに、「曲体節用」と謡うべし。

　哀傷と者、是又あわれに以前のあはれの恋声、感涙を催す心体成べし。無常音の曲聞なるべき也。凡、哀傷は、当世何事も祝言を以本とするゆえに、さのみの哀傷の曲聞をば、斟酌あるべきなり。連歌などのー座にも、哀傷の部は、はや絶えたる分也。然ば、音曲にも、ただ大かたの聞き耳あはれに、無常音を催す感聞ありて、曲のかかり美しくば、これ、肝用の哀傷なるべし。

闌曲者、高上の音声也。万曲の習道を尽して、已上して、是非をー音に混じて、類して斉しからぬ声のなす位なり。歌道にも、十体の中に、強き位を云に「鬼を取り拉ぐ」など申は、この位にてやあるべき。是は、向去却来して、いや闌けて謡う位曲也。この性位に至る、堪能にあらずばかなうべからず。其人に相応して知るべし。

一、此条条、已上。是は、ただ詮ずる所、声懸にあるべき也。抑、声がかりの事、曲所に付て大事あり。曲の奥義とも申べし。「悟り悟りて未悟未子に同じ」と云云。すでに此条条、祝言・幽曲・恋慕・哀傷・闌曲、ことごとく、その謂れどもを書して、その文言にしたがいて節・曲を付たるかかりなれば、その曲体をよくよく習得して、能一に謡うは、節体の刑木也。さて、其上に文をなすを、曲と云。この位までを極むるも、いまだ似たる曲分也。此位をすでに忘れて、覚えず知らず感聞にあらわるる所、是まことの声懸也。此位を得たらんを、曲主とは申べき也。

凡、音曲の姿かかりを数木に喩えて、その心を歌風を以て見する条条。付詞。

一、松木祝言姿万代を松にぞ君を祝いつる千年の蔭に住まんと思えば

聖徳太子の御金言、「正法尽きて禅に移り、数木枯れて松にならん」と云云。松はもとより霊木として、古今の色なく、千秋の風姿、をのづから満目青山のよそをいをなせり。祝言の曲声、安全の感音をなす所、相当是あり。

一、桜木幽曲姿又や見ん交野の御野の桜狩花の雪散る春のあけぼの

桜木は、もとより諸木の中の霊木として、唐土・我が朝の春の色をなす景物たり。然ば、曲音の匂、詠歌の幽吟、さながら花鳥の色音を以て、調感をなすべし。

一、紅葉恋慕姿下紅葉かつ散る山の夕時雨ぬれてや鹿のひとり鳴くらん

紅葉は、秋暮の情を見せて、色に染み、露置き並ぶよそをい、恋慕怨声の思いに通ず。

一、冬木哀傷姿あしかれと思はぬ山の峰にだに生うなるものを人の嘆きは

是は、花の春、紅葉の秋を経て、霜に責められ、雪に埋れて、葉落ち、枝変じたる冬木立、さながら哀傷・ばうをくの気色深し。

一、杉木闌曲姿いつしかと神さびにける香久山の鉾杉が本に苔のむすまでに

杉木はこれ、よそをいいや闌けて、神木霊社の御蔭を囲みて、諸木に類して斉しからぬ遠見あり。然ば、曲懸異なる響き、闌声たぐいなき風聞、杉木を以て喩えとす。よくよく習道して声懸をなすべし。

一、祝言の音曲、本声の姿

「夫久方の神代より、天地ひらけし国のをこり」の謡い物、是らを以て本声とす。

一、幽曲の音曲、本声の姿幽曲は五音通曲風也

「ひをりせし、右近の馬場の木の間より」の謡のかかり、是幽曲也。凡、応永年内より以来の謡い物、節曲舞など、みなみな幽曲なり。ことごとくは記すに不及。

一、恋慕音曲ノ本声ノ姿

「忍ぶれど、色に出にけりわが恋は」の謡、恋慕の本懸也。松風村雨の後段、班女、みそぎ川、是らはみな、恋慕の専らなり。

一、哀傷音曲の本声の姿

「一生は風の前の雲、夢の間に散じやすく」の謡、哀傷の本風也。

一、闌曲音曲の本声の姿

「それー代の教法は、五時八教をけづり」の謡、闌曲の本風なり。上宮太子の節曲舞、白鬚、このかかりなり。又、只詞、闌曲なり。

凡、闌曲に同音の具行はあるべからず。自他別にして、又知音の道あり。抑、闌曲に具行あるべからざる、曲道大事あり。そのゆえは、安位に座段して、なにとも、即座の気転によりて出来る曲なれば、同音の連声、曲の道あるべからず。ただ、大かた、堪能と堪能は具行あるべきか。それも、節までは具行あるべし。曲に至りては、連曲不同なるべし。曲は、覚えず知らず出来る気音也。然ば、一人一人の達声として、自他一音の曲道はあるべからず。心得べき也。此曲道を分別して、その曲主となること、音曲の奥儀也。秘伝也。凡、曲付為ところの節体の形木の闌曲までは、具行あるべき也。深秘深秘。

　一、詩序云、

治世之音、安以楽。其政和。

　　乱世之音、怨以怒。其政乖。

　　亡国之音、哀以思。其民困。

　　故正得失、動天地、感鬼神。

　一、「天之命謂之性、循性謂之道」云云。然ば、性は天、道は地なるべし。此音曲の次第にとらば、祝言は性なるべし。此性を和してかかりとなす体を、幽玄と云。又、幽玄をなを深めて感文を添うる位を、恋慕と云。恋慕に亡曲の心を付て、哀傷と云。これらを習道し終りて、安位に至りたる達音を、闌声と云り。是即道なり。これ、当道の音曲を極むる分也。

一、大学に云、「其本乱末不治」云。「万」とは「一力」也。此、祝言・恋慕・幽曲・哀傷も、祝言の安全音のカ也。いづれも、その声を全謡うは、みな安全なり。安位に座段する位、闌懸也。是、はじめの安全音にかえるは、一のカなり。是、習道の能一なるゆえなり。其本不乱末治者也。然者、ただ稽古の正力を守べき也。

一、音曲習道の次第と者、音声の下地は仕声也。声をよくつかいて、曲をなすにしたがて、たとい不足なる声なりとも、つかい足りて、なにとも心の儘なる声位にならずば、うるわしき音曲の上果には成まじき也。さるほどに、仕声を以て音曲の下地とす。さて、節をよくよく師に習いて、その形木に入ふして習得すべし。この位も、いまだ初心の分也。其後、声の横・主を心得て、文字によりて、横にあたるべき声をば横にあたり、主にあたるべきをば主にあたりて、相音に謡うべきをば地声にして、次第梯登に、習道の稽古に至るべし。習道と者是まで也。此上は不伝の曲分也。

　曲をば習はぬ道あり。そのゆえは、曲と云べきものは、まことにはなき物也秘すべし。もし、ありと言はば、それはただ節成べし。さるほどに、相伝すべき形木もなし。是は、以前の下地の仕声より、節習、横主・相音、如此の条条をよくよく極めて、達音能一の安声に坐りて、をのづから出たる用音の花匂を、曲とは云なり。是は習功を積みたる得音なり。然ば、節は有、曲は無也。此位に至りて、名を許され、道を得て、すでに師家の印可を得てこそ、我も又師家とはなるべけれ。返返、曲は習道にはなき物と知るべし。

　さて、無曲の在所をば、なにとか云べき。もし声懸のみか。又云、声をつかい、声につかわるる在所あるべし。声をつかうは節也。声につかわるるは懸なり。ここに曲音あるが、見所人の心耳に通ずるか。見所も、かならず聞得には限るべからず。女・童の心耳にも感ずる所、是すなわち曲にてやあらん。又声懸とや言はん。是らはみな、覚えず知らず、五音・四尚のなす感音なるべし。不知不知。